38

安藤昌益学派の『真斎謾筆』にみる乱神病

岡田　靖雄
青柿舎（精神科医療史資料室）

『真斎謾筆』は，1969年に千葉の高等学校教諭・山崎庸男が，京都大学医学部図書館富士川游文庫で発見したものである．これは，関東大震災で焼失した安藤昌益の稿本『自然真営道』の後半部分にほぼ相当し，それを抄出・筆写し，そこに注釈をくわえたものとされる．そのもとになった安藤の著作は，4行8気説で全体がつらぬかれているもので，稿本『自然真営道』の「人相視表知裏巻」（ここに「乱神病論」がはいっている）と同様に，安藤晩年の著作であったとされる．また安藤の処方がきわめておおくはいっている点が『謾筆』の特色であるという．また『謾筆』は龔廷賢『万病回春』と構成がかなり共通していて，安藤が『万病回春』にもっとも依拠していたと推定される．著者は確定はしていないが，いまのところ，南部生まれで江戸下町在住の医師川村錦城（寿庵）の息子，川村真斎らしいとされている．川村錦城は安藤に接していた可能性もある．

この『真斎謾筆』から，精神病，脳病に関するものをひろってみよう．

総論部分に，中風，眩暈，麻木，癲狂，癇症，健忘，嘘恡，驚悸，虚煩，不寐，邪祟があげられている．婦人門にはいくつかの精神変調，小児門には行遅，語遅，痙音，訥言がでている．そのあとには，情病，淫病，眩暈，癲病，狂病，癇病，驚悸，嘘恡，虚煩，不寐，邪祟，健忘がとりあげられている．ここまでは『万病回春』にならっているところがおおいとされる．

最後に愚惑病がとりあげられている．その内容は，愚惑病（狐附），惑色病（色欲にまどい，うっ屈し，男／女がくるとおもい独言），脱魂病（怨みから脱魂して，しかばねのようになる），神気違狂病（乱神のごとく，また正気のようで，喜悦しまたいかり，業行は半行），目ニ異形ヲ視ル病（異形，怪形をみ，ねむれず），己レト語テ己レ知ラザル病（二人相対するごとき独語），他人己レニ祟ルト視テ眠ルコト能ハザル病（我にころされたる者恨みあらんと幻視），双魂病（色欲の念より邪気あふれて身の外にこって気映），生祟病，死祟病，吾身大ニ成ルト情（オモフ）病，又小ニ成ルト情（オモフ）病，である．これらの結びというべき部分には，“狐附ヨリ此ニ至ル迄ハ，皆全ク愚惑ノ情病也〔中略〕凡テ愚惑病ナルコトヲ知ラバ”とあって，“愚惑病”の語は附き物をさすと同時に，“乱神病”と同様に総称でもあることがわかる．

それぞれの記載は「人相視表知裏巻」にあった乱神病論におけるよりはながい．乱神病論には，乱神病にはあたらぬ急切風，噎雪風をのぞき22病があげられていた．両者に共通する名はない．記載内容からは，惑色病と泥淫病，脱魂病と脱神病，目ニ異形ヲ視ル病と恐鬼病，己レト語テ己レ知ラザル病と重魂病，双魂病と分体病，他人己レニ祟ルト視テ眠ルコト能ハザル病および生祟病と生霊病，死祟病と死霊病，がそれぞれほぼ同病かとおもわれる．

おおまかにいうと，愚惑病のなかには，思い，思い込みの激しさからくる病いがほとんどである．また乱神病論にあった，進逆病と退逆病のような動的な組み合わせはない．そして『真斎謾筆』における愚惑病の記載は，「人相視表知裏巻」における乱神病論よりつまらなくなっている．さらに，総論部分における龔廷賢にならったとされる従来医学的記載と，愚惑病論および乱神病論とがどういう関係にあるのだろうか．

愚惑病論が安藤昌益の著作にもとづくとすれば，同一人がほぼ同年代に同主題につきかいた内容が，方向こそ同一といえても，具体的内容がほとんど共通しないということがあるだろうか．愚惑病論からみるかぎり，『真斎謾筆』が稿本『自然真営道』にもとづくとする定説には，疑念をいだかざるをえない．